

## 南琉球宮古語城辺町新城方言の文法

王, 丹凝

<https://hdl.handle.net/2324/5068151>

---

出版情報 : Kyushu University, 2022, 博士 (文学), 課程博士  
バージョン :  
権利関係 :

氏名	王丹凝			
論文名	南琉球宮古語城辺町新城方言の文法			
論文調査委員	主査	九州大学	准教授	下地 理則
	副査	九州大学	教授	上山 あゆみ
	副査	九州大学	講師	太田 真理
	副査	九州大学	教授	青木 博史
	副査	琉球大学	名誉教授	狩俣 繁久

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、南琉球宮古語新城方言（以下、新城方言）について、消滅の危機にある当方言の総合的記録保存を目指し、主に文法体系の記述を重点的に行ったものである。444ページの記述文法のセクションに加え、約800語の簡易語彙集と2編の自然談話資料も収録している。文法・辞書・談話資料という、消滅危機言語の「3点セット」として位置付けられるものである。このうち主要な部分を占める記述文法書は14章から成る。以下に、各章ごとの特徴をまとめる。

第1章では本論文の背景・目的・意義について述べ、第2章では新城方言についての地理・系統・社会言語状況などの概要をまとめている。第3章は音韻体系の記述を行い、第4章は文法記述に用いている諸単位を定義・導入している。第5章では名詞の内部構造を記述し、第6章では動詞の内部構造を記述している。第7章では助詞類全般について記述し、第8章では機能類、すなわち共通の語幹を持ちながら1つの語類に収まらない範疇（指示詞など）の体系について記述している。第9章では、名詞化・動詞化などの品詞転換を記述している。第10章においては名詞句の内部構造を、第11章では、動詞・名詞・形容詞述語文の構造をそれぞれ記述している。第12章においては単文の構造を記述し、第13章は複文構造を記述している。第14章では、これまでの形式ベースの記述から一転し、意味機能の観点を出発点に、それらがどのような形式に対応するかを記述し、具体的には修飾、所有、テンス・アスペクト・ムードとモダリティ、情報構造について取り上げている。

本論文の意義は以下の2点である。まず、本論文は琉球語の研究史において初めて、1人の記述者が文法・語彙・談話を総合的に記録保存した「3点セット」の成果として評価できる。これまでの試みの多くは文法・語彙・談話を切り分け、文法のみ、ないし語彙のみ、など、個々の記述に集中してきたと言えるが、本論文は1人の言語学者が、1つの方言の文法・語彙・談話を総合的に記録しようという試みに踏み出した最初の事例である。このように、消滅の危機にある琉球語に対する記録保存のあり方として新たなフェイズを切り開いたと言える。

次に、新城方言の言語現象と、これまでの琉球語学の知見、および類型論的・理論的知見を照らし合わせ、様々な新規な報告をおこなっていることも特筆される。例えば、新城方言の再帰代名詞に3種類あり、それらの使い分けに関する明快な分析を示した上で、その使い分けがCase Hierarchyに沿って説明できることを提案している。こうした様々な新規な知見や議論の一部は、個別の学会発表、投稿論文としてすでに公開されており、学会賞（日本言語学会発表賞）も受賞している。

本論文にはもちろん、改善すべき点も存在する。特に、論文執筆期間の大半を占めたコロナ禍による現地調査の不十分さにより、分析の密度に多少のばらつきがある。しかし、オンライン調査を

丹念におこなってそれを補い、調査が不可能な部分については何が不十分であったか、何を今後調べなければならないかが明確に示されているため、これを参考に今後記述を進めていく人（宮古語の専門家に限らず、琉球諸語全般の専門家）にとって極めて有用である。そもそも、コロナ禍以前のあらゆる文法書に比べても最も詳しい文法記述を提示しており、本論文が非常に優れた成果であることに揺るぎはない。

よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士(文学)の学位を授与されるに十分な能力を持つと認めるものである。